

昭和五十七年度 春季公開講演要旨

近代仏教学ということ

大谷大教授
工学博士

桜部 建

「近代仏教学」という呼称を時々耳にするようになったのは、十余年前のころからかと思う。そのころ、それは何か耳新しいことばのように響いたのではあったが、今は漸く一般にかなり広く使われて、この呼称もいわば市民権を得たかのようなのである。しかし、それは必ずしも厳密に規定された意味に用いられているとは言えないように思うので、はじめに、この語の意味を限定して、私なりに明らかにしておく必要がある。

ここに「近代」というのは、まず、明治以後を指す、と見てよい。ただ、明治以後の仏教研究をすべてひとしなみに近代仏教学と名づけるのではなく、徳川期までの仏教の学問に比して、資料的にも方法的にもあるいはその意趣においても、明らかに殊別できるような新しい型の仏教研究を指して、特にそう呼ぶのである。(1)資料的に別であるというは、従前の仏教学がほとんど専ら漢文訳の経律論およびそれに基いてシナ・日本において述作された諸著を「聖教」として研鑽の対象にしていたのに対して、ここにいう近代仏教学は、それらに加え、幕末開国以後わが国にもたらされたサンスクリット語・パリ語の原典およびチベット語・漢語その他の仏教文献、さらにサンスクリット語・チベット語・漢語の一般文献をも、そしてさらに文献以外の考古学的遺品その他の

さまざまなものをも、広く「資料」として駆使しようとするからである。(2)方法的に別である、というのは、従前の仏教学が、おおむね諸宗の祖師以来の伝統説を重んじて、その「宗義」を明らかにしようとすることに中心を置き、ことに近世以来多く宗乗・余乗という形において行われるのが常であったのに対して、近代仏教学は、流入して来た西洋の学術の方法を取り入れ、宗門的制約に關らぬ自由で批判的な態度をもって、歴史的研究・文献学的研究あるいは教理論的研究などにその新分野を開拓しているからである。(3)意趣において別が立てられるというのは、内面的・宗教的な欲求に従って仏道を歩もうとすること、普遍的な欲求から発する仏教の学的研究とが、ひとまず区別し得るもの、あるいはむしろ区別すべきもの、であるならば、その限り、近代仏教学は明らかに後者に属しているからである。

このような新しいタイプの仏教学が勃興した因由は、第一に、西欧の文化・学術の影響である。われわれは、他の諸学と同じく、仏教学をも、まさに、西欧の近代文明から学びとったのである。その点で、明治の代にわれわれはまことにすぐれた先学の輩出という幸わせをもった、といえる。南条・笠原を第一陣に、藤島・常盤井・高楠を第二陣に、荻原・姉崎・渡辺らを第三陣にと、続々俊英を送り出した日本仏教学界は、それらの人々の異常な努力と才能によって、英・独・仏の諸国から豊かな学術の稔りを摂り入れ移し植えることができたのである。

それに加えて、もう一つ、近代仏教学を培った温床として、徳川中期以後の社会に見出される究理の傾向、学問的志向を、指摘できると思う。羽仁五郎『日本に於ける近代思想の前提』が注意することく、明治期に先立つ時代におけるこの究理の傾向が、明

治期に至って西洋からの華々しい近代学術移植の成功の素地をなした。それは仏教学の分野についても確かに言えることである。

かつてない高い水準に達した徳川後期の漢学の隆盛(吉川幸次郎『漢文の話』など)を背景にして、元和元年(一六八一年)完成していた鉄眼版一切経の普及によって拍車をかけられて、当時の仏教社会には新しい学問の気運が動きはじめた。それは狭い宗派的立場を離れて、もっと広い視野から仏教を見直そうとするものであった。そこに見られる特徴の一つは復古主義・本源遡向であり、もう一つは理の尊重(教より理を重んずる、あるいは情を退けて理を重んずる)である。鳳潭(一六五四—一七三八)・普寂(一七〇七—一七八一)らをそのチャンピオンとして挙げることが出来る(宇井博士は、普寂を目して「近代仏教学の先駆」としておられる)。これらの人々の業績については神田喜一郎博士に「江戸時代の学僧たち」という文章(『芸林談叢』所収)がある。この江戸時代仏教学の培養土が明治期の近代仏教学の開花を生んだ。それは、例えば、南条博士の若き日の漢学・仏学のなみなみならぬ修練が先生渡欧後の活動の素地をなしているという事実と、無関係でない。

ところで、上に定義したような近代仏教学こそが、当然、こんにちの大学における一つの課程として教授され研究されるべきところの仏教学のあり方である、と私は考える。いうまでもなく、仏教の学問は、現代においても、けっして近代仏教学に尽きるものではない。近代仏教学は、よくいわれる「解学」と「行学」ということからすれば、明らかに解学の一分にとどまる。あるいは金子大栄師が説かれる経典宗学・経典史学・経典文学という三つの範疇(『経典三学』、大谷学報44—1)にあてはめていえば、経典

史学の一面にとどまるものである。経典史学という言い方は、金子先生独自の用語で、先生自ら「適当でないかも知れないが」といっておられる程であるから、少しく註釈を要するが、先生はこの語によって、仏教に対する「自由研究」を意味しておられる。それは、仏教によって人生を学ぶのでなく、仏教を対象としての学的営為である。そこでそれは、経典によって自分の生きる道を見だしてゆく(先生の言い方からすれば)、聞思の学すなわち仏弟子の学であるところの経典宗学、および、経典の表現方式を明らかにしようとする「教相」の学である経典文学(いずれも先生独自の用語であるが)と、対比される。先生は、この三つが協力することによって仏教が明らかになり仏法が興隆する、といっておられる。そして、卑見からすれば、大学における一課程としての仏教学の内容となるべきは、この三つの中では、まさに経典史学に当るのである。

これは、もちろん、大学人が経典宗学、聞思の学、仏弟子の学としての仏教学をもち得ない、あるいはもたなくてよい、ということではない。大学人また、人として世を生きるものであるから、その限り、聞思の学・信解の道・仏教を行証する道を、当然もち得るし、仏教者の立場からすれば、もつべきではないかと大学人に呼びかけ得る。ただその道は、大学人だけでなく、万人が、教法に有縁のひとりひとりとして、歩むところの道である。大学人であるか否かを問わず、また、その身が大学という場にあるか否かを問わず、その人の生涯かけての行証の道である。一方、「経典史学」すなわち近代仏教学は大学に在らねば、大学人でなければ、なし得ないとは必ずしも言えないけれども、大学こそが、最もそれに適った場である。日本における大学というものが、本

来、近代学術の教授研究の場として設置せられたものであるところからして、そういう近代的施設である（したがってそれは *university* に求道の道場であるのではない）大学の一組成分として仏教学課程があるならば、そこにおいて課せられる学問のあり方は近代仏教学でこそある、というのである。

それは、仏教の勝義に対してはまさしく「仮名の修学」の分際にとどまる。ただ、人間の一面は「酌流尋本源」を求めて動くから、それがいま大学という場において近代仏教学として追求されねばおかれぬのである。このようなことは、他の多くの学問の分野においてほとんど初めから問題とすに及ばぬことであろうが、永い「学道」の伝統をもつ仏教について、新しい人文科学の分野としての仏教学を考えるとき、金子先生のいわゆる経典三学のけじめは、念を押して、明らかにしておかねばならない。

さて、その近代仏教学において今日まで主流になって来たのは何か、といえば、文献学的研究、ことにインド仏教文献に対するそれ、である。欧米で仏教学といへば、現在もまずフィロロジカルな研究が中心であることは、例えば手近なところドゥボング『仏教研究の歴史』などにも述べられている。わが国の近代仏教学も欧米の研究の直接の影響の下にあって、文献学的研究の分野において最も目立った成績を示している。そして、その文献学主流あるいは文献学先行ということが、一方においては、問題点ともなり反省点ともなる。

田村芳朗教授はいう——ヨーロッパの学問の鵜飲みで、文献考証学が主となり、「思想的的研究」が欠落している。これからは宗学の再発掘が必要である。それには、古い宗学の枠をとり払ったまざしく「思想的」な取り扱いがなされねばならない。ここ

に、思想的的研究とは、生きる上の問題として、また、現在から問いを投げかけながら、その意味で主体的な、そして時に批判的な、眼をもつて仏教思想を史的に研究することである、と（筑摩書房刊『仏教入門』。宮坂宥勝教授は説く——これまでの仏教学は古典研究に終始し「現代を問題とする創造的な学問研究はほとんどまだ成立していない」のが現状である。現代の世界の問題意識と連関つけた「新しい仏教を創造してゆ」くのが今後の仏教学の課題である、と（『財と労働の価値——仏教の経済観』）。

それらに対して柳田聖山教授は主張する——ことばという器なくしては思想を盛ることはできない。いまは、盛るべき器のない思想の独り歩きの危険の方がむしろ強くなっている。言葉の研究が言葉に終るのがいけないので、言葉は必ずその中身（すなわち、思想）と共にある。それを明かすのが真の文献学ではないか。その意味で（近代仏教）学者はむしろ文献学あるいは歴史考証に一層徹底すべきでないか。それによってかえって彼は学の限界を知り謙虚であり得るのだ、と（『仏教入門』）。

考証的文献学に偏せずに思想的の研究をという田村説や、言葉が盛っている思想を明かすのが真の文献学という柳田説に関して、想起されるのは、金子先生が、上掲の「経典史学」について述べられた中で、「研究発表」と「調査報告」とを区別せよと言っておられることである。文献の整理・調査と区別される意味の「研究」を、先生は「義理を明らかにすること」であると言われる。

「調査報告」は素材の提供にとどまる。義理を明らかにする「研究発表」こそが「経典史学」の名に値する。そして、先生によれば、史学には史観が必要である。史観なくして歴史を語ることはできぬ。歴史を貫いているものを見出だす（義理を明らかに

する」とはその謂であろう)、それが経典の史学である。とすれば、そういう意味の思想史こそ、先生の望まれる近代仏教学のあり方であると言えよう。

ここに至ってわれわれは、近代仏教学の方法論の問題に逢着するように思う。近代仏教学においてインド仏教文献のフィロロジカルな研究がもっとも顕著な成績を挙げているということは、その分野が梵・藏・漢の比較研究などにおいて確かな方法論をもつからではあるまいか。漢文訳仏典および漢文仏典(それが実は量的には最大であるのだが)の領域には、また別な事情があるけれ

ども、総じてフィロロジカルな研究には方法論的に拠るべきものが明らかに存する。史的考証の分野においても、同様に、近代史学の方法論が所与としてある。それに対して「義理を明らかに」することを目指す「思想的」研究は、この点で最も困難な開拓の作業を必要とすると思われる。思想史的研究が方法的な基礎を確立し、それが真の意味の仏教概論(金子先生の先駆的試み以後その名に値いするものが出ていないことを柳田教授は指摘している)に結実するために、今後、多くの努力がなされることを信じて疑わない。